
芳乃家の一日

咲良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

芳乃家的一天

【Nコード】

N3524P

【作者名】

咲良

【あらすじ】

義之とアイシアが恋人になった後日以降の話です。

芳乃家の賑やかな一日を書いたショートストーリーです。

二次創作が苦手な方はご自身の判断でお願いします

（前書き）

コンセプトは義之×アイシア×さくら。
色々と羨ましいですね、義之くんw

「ただいまー」

「ただいまーっと」

アイシアと共に帰宅すると、家主の声がした。

「あ、義之くんにアイシア。おかえりなさい」

「さくらさん…今日は早いです……」

と声をかけながら居間に入る。
が。

「……ね……」

「あにゃ、どうしたの義之くん？固まっちゃって」

そこには何故か風見学園本校の制服を着たさくらさんが居た。

「さくらさん……何でそんな格好を？」

「何でって…義之くんを攻める為だよ」

「攻めるってどういう事ですか」

「そりゃあ、夜にあーやってこーやって…」

……… 会話が成り立っているような気がするのは俺だけ？

と思っていたら、横で呆然としていたアイシアがさくらさんに向かって声を上げる。

「あー！それあたしの予備の制服じゃない！」

「えー、いいじゃん。予備だしー、ボクがお金払ってるんだしー」

さくらさんはここ最近、アイシア相手には割と子供っぽい所を見せたりする。

やはり枯れない桜の管理から解放された後の反動だろうか？
あの件でさくらさんは毎日追い詰められていたみたいだし…。

「よくない！いつ義之くん制服プレイ求められてもいいように、予備は絶対必要なだから！！」

何を言うかこの人は！？

いや確かに恋人から一歩前進すればそうなるけどさ！
と俺が目点をしている間に、さくらさんもとんでもないことを言う。

「にやはは。学園もこの家もボクの管理下にあるからね、そんなことできるわけ——って、まだしてすらなかったね」

あなた俺の親で教育者ですよね！？
とつつこみたいのだが声にならない。

「うう〜…痛い所を突かれた…」

「ごみんごみん。まあ、制服プレイくらいそのうちできるよ」

…もつどこをどうつつこめばいいのか。
ていうか、さくらさん『』が付いてますけど含みはないですよ？

「さくらさん、保護者と学園長の両方を務めてるんですからそういう発言はどうかと…」

「えー、いいじゃん。身内なんだしー」

そう来ましたか。

いやでも身内とはいえ、度を超すのはちょっと。

それに、こんな会話を音姉に聞かれたりしたら俺の身が危ないんですから……。

「それでさくら、何でこんな事を？」

ようやく落ち着いたのか、アイシアがさくらさんに問い質す。その答えは、誰もが意識することのない深刻なものであった。

「だって……ボクは学生生活はできないんだもん。学園長になって夢は叶ったけどさ……」

なるほど。

学生生活は一度終えたら二度とできないもんな。

でも、さくらさんの見た目なら紛れ込むこともできそうな気が……。

「わかるよ……学生にしかできないことは沢山あるし……」

「それに制服プレイは学生にしか似合わないもんねー」

「って、何でそこに話が飛ぶのよ!」

……どうやら俺の力ではこの領域に介入できないらしい。
どうしようか？

A・夕飯の支度でもしよう

B・黙って聞く

C・自室に戻る

「……あ、俺そろそろ夕飯の支度しますね」

自室に逃げるよりはマシ……なはずだ。
逃げてはいない、うん。

「これでよし…と」

鍋にかけた火を止めて食器の用意を始める。

その間に炊飯器からはご飯が炊けたことを知らせる電子音が鳴り響く。

今日の食事当番は俺なのでカレーにした。

「…といつても、献立考えるのが面倒つてのが本音だけだな」

食器の用意を終えて鍋の蓋を開ける。

中身の具合を確認したところで、さくらさんがふらふらと台所に入ってきた。

「うにゅ、お腹空いたよ。義之くん、ご飯まだ？」

「今できたんで少し待っててください」

「うん、待ってるよ」

さくらさんは遠くへ手を振って居間に戻った。

アイシアにお腹を空かせてたら悪いし、早いとこ支度してしまおう。

「「義之くん、あ〜ん」」

「えーと……」

不意打ちだった。

さっきまで「義之くんのカレー美味しい♪」とか言って食べてたはずなのに、この不意打ち。

…これはいわゆる『究極の選択』っていうやつか？
どっちにしろ、応えないといけない気がする…。

「あーん」

「えへへ…どう義之くん？美味しい？」

「ああ、美味い」

「うにゃあ…負けちった」

俺の親であるさくらさんも大切だけど、今は恋人のアイシアのほう
が大切ってことで。

それで勘弁してください、さくらさん。

「それにしても、二人とも最近超ラブラブだよー」

「そ、そりゃそうですよ！当たり前じゃないですか。恋人同士だし
…」

「よ、義之くん…（キュン）」

さくらさん、何気に含みのある言い方するなあ…。

でも普通だよ、俺とアイシアはお互いの事好きなんだし…。

………こっいつ台詞はあまり口に出さない俺もどうかと思っけど。

「…さくらさん、さっきのアレ根に持ってますんか？」

「別に…？ボクはただ名案を思いついただけだよ」

「何ですか、その名案って？」

俺が問い質すと、さくらさんはアイシアを自分の隣に呼ぶと何やら

耳打ちしている。

その間、アイシアの顔が徐々に赤くなっていく。

……人の恋人に何を吹き込んでるんですか。

「…という訳なんだけど、どうかなアイシア？」

「ああっ、えっと……」

アイシアがちらつと俺を見る。

赤面しながら。

…一体何を吹き込まれたんだ？

「まあ、決めるのは後にしてさ。早く食べちゃおうよ」

「う、うん…」

「俺はもう食べ終わってるんだけど…」

「よし、終わりっ」と

洗い物を片付けて食器を棚にしまう。

さて、これから何をしようかな。

とりあえず、アイシアの部屋にでも…。

「あ…義之くん、お疲れ様」

「アイシア」

いいタイミングでアイシアが台所に入ってきた。

「ちょうどよかった、今部屋に行くつもりだったからさ」

「へ、部屋っ！？部屋って、私の…？」

「そうだけど…って、大丈夫か？そんなに動揺して…」
「だ、大丈夫だよ！体はいたって健康！」

そう言っただけでガッツポーズを決めるアイシア。
「くそう、可愛いじゃないか。
ズルいぞそんなに魅力全開にして…」

「義之くん！アイシア！ちょっと来てよ！」

とそこへ、さくらさんがはしゃいで現れた。
こういう所が子供っぽいといつかなんといつか。

「どうしたんですか？」

「うにゅ…やられたよ。あんなの強すぎて無理だよ」

「さくら、何の事を言ってるのかさっぱり分からないんだけど…」
「いいからとにかく来てよ！」

「…いつの間に買ったんですか」
「うーん…昨日か一昨日の帰りかな？」

さくらさんに連れられて居間に入ると、ゲーム機がテレビに接続されていた。

画面には『YOU LOSE』の文字。

「テレビゲームくらいで大騒ぎしないでよ…」
「とか言っただけで、アイシアも興味津々じゃないか」
「う…」

でも、さくらさんにしては珍しいな。
今までテレビゲームなんて買った事なかったのに…。

「しかもDBじゃないですか。さくらさん知ってたんですか？」
「うん。お兄ちゃんがDBの初版本を持ってたからよく読んでんだ」

「でも60年も人気を保ち続けるなんて当時は思わなかったなあ…」
「もう3回目のリメイクだしな」

しかもこれPS3のソフトだし。

さくらさん、やけに豪勢だな。

ご丁寧コントローラーも二つあるし。

「確かハツ。ヒヤックが出るんだっけ？ベ。ータ超サイヤ人3とか
ブ。リー超サイヤ人3とか…」

「義之くん詳しいね」

「うん、まあ…杉並が色々言ってたからな」

「ベ。ータとブ。リーに超サイヤ人3なんてあつたんだ…ボク知らなかったよ」

で、さくらさんが勝てない相手って誰なんだ？

えーと……魔神ブ。純粹？

こりゃ初心者には厳しいよな。

「さくらさん勝てないんですか？」

「そうなんだよー！ブ。純粹って漫画でこんな鬼畜じゃなかったよ！
！？最後に元気玉で消し飛んじやったのに…！」

「さくら、漫画とゲームは強さが違ってくるから…」

「うーん。ちょっと貸してくださいね」

俺はそう言つてコントローラーを手に取り、コンティニューの選択肢でYESを選択する。

「うにゃ？義之くんできるの？」

「ええ、そこそこ」

「でもあたし義之くんがPS3やつてる所見たことないけど…」

「いや、杉並ん家で対人戦やってたからさ」

「杉並くん…勉強もちゃんとやってるよね……」

ブ。純粹くらいなら余裕かな？

自キヤラは孫。空の超サイヤ人3状態か…。
いけるな！

「すごいよ義之くん！ノーダメクリアなんてボクにはできないよ」

「義之くんカッコイイ…（キュン）」

「まあ…杉並に嫌という程やらされたし……」

まさか杉並の影響がここで役に立つとは思わなかった。
今回は杉並に感謝しとくか。

「あれ？もうこんな時間だ」

「あにゃ、ホントだ。そろそろお風呂沸かさないと…」

「あ、俺が沸かしてきますよ」

そう言つて俺は立ち上がり、風呂場へ向かった。

「アイシア、チャンスはこの後だけだよ？」

「うっ…さくらったら唐突過ぎるんだもん……」

「さくらさん、お風呂沸きましたよー」

「ありがとう義之くん。ボクは後でいいから、先に入っていいよ」

「そうですか。じゃあ先に…あれ？アイシアは？」

「アイシアならボクが貸したDB初版本に熱中してるよ」

「はは…やっぱりアイシアも興味あったんだ」

でも初版本って今じゃなかなか出回ってないんじゃないか？

…まあいいか。

さくらさんなら持ってもおかしくないし…。

「それじゃ、お先に失礼します」

「うん。」「ゆっくり」

「ふう…」

浴槽に浸かって一息つく。

今日も色々あったな……その中でもさくらさんには驚いたけど。

「さくらさんが本校制服着ても違和感なかったもんな…」

「それはボクが子供だって言いたいのかな？」

………ホワイ？

ちよっと待て、まさか——！！？

——風呂場にさくらさんが居た。

「んなっ！？さ、さくらさんが何故ここにっ！！？」

「そりゃあ、ここボクン家のお風呂だし」

「いやいや、そうじゃくて！何故さくらさんが俺と風呂場にいるのかを聞いてるんですよ！！」

俺は目を逸らしつつ、さくらさんに問い質す。

するとさくらさんはとんでもないことを言う。

「えー、いいじゃん。親子なんだしー、昔はよく一緒に入ってたしー」

「あれはまだ俺がガキの頃の話じゃないですか！？」

「義之くんは今でも十分ガキだよ」

声を荒げて反論するが、あっさりとおしらわれてしまった。
この人には恥じらいってものはないのだろうか…。
とその時風呂場の戸が開いて、アイシアが入って来た。

「ちよっ！アイシアまで！？」

「あああー！！！？何でさくらが義之くんが入ってるのよ！？」

「にやはは。アイシアが遅いからだよー」

いやそういう問題じゃないでしょうに！？

二人とも状況は理解してるはずだ！

だとしたら何故こんなことに！？

しかもさらに目のやり場に困るんだけど！

「というか義之くん！あたしとはまだ一緒にお風呂入ってくれないのにさくらとはもう……」

「みんなの目があるから普段は無理だって！それにさくらさんと入

つてたのは本当にガキの頃の話だから！」

「でも現に入ってるじゃない！」

ガラガラッ！

「わ、私だつて入ってましたよ！今でも一緒に入りたいのに弟くんが許してくれなくて」

「音姉！？いい加減世間体とか考えよう！って準備万端だし！？」

なんか流れで音姉まで乱入してきてしまった。

「と、言う訳で。義之くんは誰の胸が一番好きなのかな？」

流れの前後が全く繋がってないんだけど…。

「いや、そもそも比べるも何も知ってるのはアイシアの胸だけだし」

「ボクはあの時から変わってないよ？」

「なっ、義之くん！さくらの胸見てたの！？」

「いやだからあれはガキの頃だつて！」

「わ、私はあの頃より成長してますよ！」

「手っ取り早い話、義之くんにみんなの胸を確かめて選んでもらえば全員納得だよな」

「やっぱそう来たか！ていうかみんなもう少し恥じらいを持とうよ！！」

いやもう本当、誰か助けて……。

「あ、そうそう。音姫ちゃんに一つ言わなきゃならないことがあるんだ」

「言わなきゃならないこと……？」

「うん、あのね…」

そしてさくらさんは真剣な表情を見せ、目を伏せながら言い切った。

「音姫ちゃんの胸は、もうこれ以上成長しないんだ」

「…そ、そんなはず不是吗。実際に昔より順調に育ってる訳ですし…」

「魔法使いは成長が止まるという設定があつてね。ボクやアイシアを見てよ」

うわ、すごい…というか酷い説得力だ。

「で、でもお母さんはそんなこと無かつたし……」

「それはあれだね、生まれた時点で由夢ちゃんに持つてかれてたんだよ、きっと」

「うつつ…うわああん！……！」

音姉は泣きながら走り去っていった。

「投げやりな上に容赦ないね、さくら」

「こうでもないかと余計な敵が減らないからね」

「……結局ターゲットは俺ですか」

アイシアの言葉には同意するが、さくらさんには同意できないな…。

…音姉、明日立ち直ってればいいけど。

「さてと、ライバルも撃退したことだし。お邪魔しまーす」

と言って浴槽に入ってくるさくらさん。

…マジですか。

「あつ！さくらに抜け駆けなんてさせないんだから！」

えええ！？アイシアまで本気なのか！？

ちよつと待ってくれ！

これは色々とマズいんじゃない……！

とつつこみたいのだが声にならない。

ていうか既に入っちゃってるし…。

「いやゝ、三人で入るとさすがに狭いね」

「さくら！義之くんにくつつきすぎよ！！」

「えー、いいじゃん。親子なんだしー、減るもんじゃないしー」

だからそうやって子供みたいな論理で断定しないでください。

あとできれば体を離してください…。

「な、なら私だって！彼女なんだし、付き合ってるんだし！」

と言って体を密着させてくるアイシア。

やばい…鼻血出そう……。

「む、そうきたか。……てりゃ！」

「きやあつ！？」

「ぶつ！？」

不意に、さくらさんがアイシアの体に巻かれたタオルを剥ぎ取った。当然、見えてはいけけないはずの絶対領域が露になった訳で…。

「ちよつとさくら！何考えてるのよ！！」

「いやゝ。義之くんに決めてもらうには、こうするのが一番手っ取

り早いかなって」

「もう！ふざけるのもいい加減にしてよ！」

「ふざけてないよ」。ほら、ボクもこれで同じだし」

さくらさんはそう言って自分の体に巻いていたタオルを取る。
そしてまたもや絶対領域解放。

「さて、義之くん。どっちの胸が好みかな？」

「……………」

「よ、義之くん？」

俺はとうとう意識が遠のいていき、目の前が真っ暗になった。

「はにゃ！？義之くん！？」

「義之くん！大丈夫！？義之くんっ！！」

薄れゆく意識の中で、アイシアとさくらさんが俺を呼ぶ声がこだま
していた……。

「……う……ん……………」

ゆっくりと意識が覚醒する。

目を開けると、俺は自分の部屋でベッドに寝かされていた。
記憶を辿ってみてようやく思い出した。

「そっか…俺、風呂場でのぼせちゃったのか…」

多分、アイシアとさくらさんが部屋まで運んでくれたのだろう。事故とはいえ心配かけたのは事実だし、後で顔出しに行こう。と思ったその時、部屋のドアがノックされる。

そして半分開いたドアの間から、アイシアが顔を覗かせる。

「義之くん…起きてる……？」

「あ、アイシア…」

その瞬間、心臓が跳ね上がった。

風呂場での出来事を思い出すだけで、頬が一気に赤みを帯びていく。それでもアイシアが入りたがっているようなので、入るよう促す。

「さつきはごめんね。ムキになっちゃって…」

「いいよ、別に謝らなくても。別に、その…嫌じゃなかったし……」

「え、ああえあ…う、うん……」

自分で言っというて自爆してる俺って…。

こんなの涉に知られたら「このハーレム野郎が！敵め！全国男子生徒の敵め！！」とか言われそうだ…。

「そ、そういえばさくらさんは？」

照れ隠しに話題を変える。

まあ、アイシアも今はそのほうが助かるだろうけど…。

「さくらなら居間にいるよ。何だかすごく落ち込んでるみたい…」
「そっか…。後で声かけてあげないとな…」

さくらさん…やっぱり罪悪感を感じてるのかな……。血は繋がってないとはいえ、親だからな…。

「それにしても、さくらったら…。何で私を出し抜いて義之くんとか…」

「ま、まあ…正直俺もビビったよ。てっきりアイシアが最初に来るかと思ってたし…」

「え？あ！ああうあうあ！？え、ええと…：…今は…その」

あ、今のあわあわしてるアイシアも可愛いかも。

そんな仕草も愛おしくて、悪戯心が湧いてきた。

…：…ちよつと弄ってみよう。

「最初にアイシアが来るかと思って、期待してたんだけどな…」

「え…：…ええええええええ！？！？よ、義之くん！そ、そんな…ああの！えあええと、その…」

「欲を言うなら、アイシアと二人だけで入りたかったというか」

「よよ義之く。 # & % x \$ * / ♀ ! ? ! ? ! ? ! ?」

…うん。もうちよつと楽しみたいとこだけど、アイシアが沸騰しそっだな…。

仕方ない。この辺でやめとくか。

「ああつ、ごめんアイシア。冗談だって、ちよつとからかってみただけで…」

「え…：…ええー！？冗談だったの今！？ひどいよ義之くん！」

「ご、ごめん。なんか見てて可愛いなーって思って、つい」

「うう…：…私は本気にしてたっていうのに…」

「あ、でも全部冗談って言えば嘘になるのかな？その、まあ…アイシアと入りたいって気は実際ある訳だし」

「え？あ…わ、私も義之くんと…入りたいな」

「ま、まあ…。さくらさんが乱入してこなければいいんだけどね…」

そんなこんなで二人きりの時間を満喫していた。
もう少しこのままでいよう…。

思ったが、さくらさんをすっかり忘れていた事に気付いた。

「あ！そういえば、さくらさんをほったらかしにしたままだった！」
「そういえばそうだね。少し様子を見に行こう？」

俺はアイシアの言葉に頷き、居間へ向かった。

「そうだよね…ボクは貧乳だよね…ナイチチだよね…おまけに義之くんをのぼせさせちゃって…保護者失格だよ…ああ…今頃義之くんはアイシアと楽しく会話を……………（ブツブツ）」

居間に入った俺とアイシアが見たものは、ネガティブ思考全開の変わり果てたさくらさんだった。

「さ、さくらさん！？大丈夫ですか！？正気に戻ってください！！さくらさん！！！」

俺はさくらさんの両肩を掴んでガクガクと揺さぶる。

すると我に返ったのか、暗かったさくらさんの瞳が光を取り戻す。
と思った瞬間――

「ふええええん義之く〜んっ！！！！」

「大丈夫ですか、さくらさん」

子供モード全開と言わんばかりに、さくらさんが飛び付いてくる。

どうやら相当病んでいたらしい。
その反動か、さくらは今までで一番子供っぽい面を露にしている。

「ふふっ…。さくらはまだまだ子供ね。」

「ひぐっ…。うるさいなあ…。ほっというてよお…」

「まあまあ」

涙目でさくらさんが拗ね始めたので、俺は「気にしないでください」と言っただけ。

「だいぶ冷えてきましたし、こたつに入りますよ。さくらさん」

「うにゅ…。寒い…」

「うーん…。やっぱりこたつは温かいなあ…」

そうして、俺とアイシアとさくらの三人でこたつに潜って過ごした。

「へくちっ！」

「うう…。まさかあのまま寝ちゃったなんて…」

「だから言っただろ…。こたつで寝たら駄目だつ…。へくしっ!!」

翌日、こたつの中で寝てしまった俺たちは三人揃って学校を休むハメになった。

でもまあ、みんなで心地良く過ごせた時間だったんでよしとしよう。

これはそんな賑やかな、芳乃家での一日の話であつた……。

（後書き）

楽しんでもらえたでしょうか？

まあ、見るからに妄想まっしぐらですがw

最後まで読んでくれた方の皆さん、どうもありがとうございましたー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524p/>

芳乃家の一日

2010年12月7日08時29分発行